

図書の雑感

情報通信工学科 青海 恵之

図書について寄稿を依頼されたが、特別に主張したいことがあるわけではないので、思いつくことを述べることでお許しいただきたい。図書といえば読書を連想する。読書もいろいろであるが、一言で言えば楽しみである。小学校や中学校で読書の大切さを教わったものであるが、時計を分解したり、ラジオを組み立てたりする方が面白く、読書は大嫌いなほうであった。大学に行って人並みに読書をしなければと思い立ち、パール・バックの『大地』を読んだ。この本の雄大なスケールは私の読書に対する認識を一変させた。その後も何冊か著名な海外の小説を読んだが、カタカナの人名や地名がわずらわしくなり邦人作家の本を読むようになった。石川達三の『青春の蹉跎』は印象に残った小説である。一時期は高橋和己に共鳴して、『悲の器』など4冊程読んだように思う。この作家が40歳で亡くなったことをラジオで偶然に聞いた時は軽いショックであった。社会人になってからは歴史小説の気軽さと痛快さに惹かれて、司馬遼太郎の小説を結構多く読んだ。近年は多忙でまとまった読書はできない。どのような時期にどのような本を読むかを特に考えたことはない。結果としては、当然であるがその時期に自分が共鳴できる本が選択されている。今まとまった読書ができないのは、多忙というより感受性に問題があるのであろう。時間があれば好きな小説を繰り返して読みたいと思う気持ちがある。そう遠くないうちに時間も自由になるであろうから、楽しみである。もし、読書が嫌いな学生がいるならば、考えを改めないと大損をするに等しい。著名な作品は必ず訴えるものをもっており、感受性豊かな青年時代には読みたい本にすぐに当たるはずである。

図書といえば次には教科書を連想するが、この学校で授業をして、学生の教科書がきれいなことに驚く。褒めているのではない。我々とは時代が違うわけであるが、中学や高校では教科書を暗記するまで読んだ記憶がある。数ページに限られた試験勉強にはそのことは十分可能であるし、そうすることにより、どのような問題に対しても一定以上の点数をとれるはずである。ノートは単なるメモであり、教科書で勉強という姿勢を私は望みたい。大学になると教科書や参考書は多種多様であり、自分に合うや合わないも出てくる。学校で選定された教科書で、これはよかったと印象に残ったものはあまりない。専門の参考書の中では、ファインマン物理学は別格である。私がこの本に出会ったのはずっと後のことである。また、読破したわけでもない。もうずっと前から話題の本であったはずであるが、恩師から勧められた記憶はない。ときどき思い出して手にするとそれだけで豊かになった気分してくれる本である。同時に、もっと早くから会いたかったと残念な気持ちになる。余談であるが、ファインマンは他の著書で、量子力学の革新性は相対性理論の比ではないと述べている。相対性理論といえばアインシュタインであり、普通に物理の神様のような存在である。電磁場テンソルの式程式の美しさに接して、その偉大さを実感した者として相対性理論が軽んじられたことに、一瞬心情的な違和感があった。私は物理学が専門ではないので、専門の先生方の印象はどうであろうか。

図書と言えばコピーを連想する。図書のコピーは違法である。ある大学の先生が、心血を注いで書き上げた書籍を簡単にコピーされて、不要になればさっと捨てられたのではたまらないと言っておられたが、誠にその通りであると思う。しかし、図書室に行けば希望の書籍が無料で借りられるとなれば、コピーをとりたいというのも人情である。図書館というのは、コピー技術の発達以前からあったものであるが、今日においてもその運用が変わっていないことにも問題がある

のではないか。コピーを止めるには貸し出しを禁止するしかない。コピーが必要な場合は図書館が有料でコピーサービスを行い、その代金を著作者に還元すればよい。実際に文献複写ではそのようなサービスが行われているのであるから、図書館に何のチェック機構もないというのはアンバランスである。コピーの問題は私が簡単に語れるような問題ではないので、この程度にしておきたい。